

自習型科目 GCI e-learning ： GCI 完成年度の分析

阿佐宏一郎*・畑倫子**・与那覇信恵*

[キーワード] CALL、e-learning、自習型授業、三ラウンド・システム

[要旨] Bunkyo Global Career Institute (GCI) の英語選択科目「e-learning」は、CALL システムでオンライン学習をし、3 週間に 1 度のテスト時のみ教室に集まる自習型の授業である。阿佐・畑・与那覇 (2013) では開講初年度の 2013 年度前期の結果について報告した。その際明らかになった問題点の改善等を目指し、評価方法や指導方法の修正を行ってきた。GCI は 2016 年度に完成年度を迎えるが、本稿ではこれまでの受講生の 3 年半分のデータをまとめた結果を報告している。GCI e-learning の履修率は約 32.7% で、毎学期ほぼ 3 人に 1 人は履修していた。また、TOEIC の前後比較を、データの揃っている現 3、4 年生の 1、2 年次で行ったところ、履修あり群の方が 38 点多く伸びたことが分かった。2013 年度後期からのアンケートをまとめた結果、受講生は本科目に対して概ね好意的な評価をしていることがわかった。

1. はじめに

GCI e-learning は、2013 年度に開始した学部横断型プログラム Bunkyo Global Career Institute (以下 GCI) 内で提供されている英語科目の 1 つである。GCI 科目の履修が許可されるかどうかは、入学前あるいは入学直後に審査が行われており、受講生達は、各学部 (外国語学部・経営学部・保健医療技術学部・人間学部) における科目に加えて、GCI の科目も受講する。必然的に、授業数は一般の学生よりも多くなる中で、選択科目である GCI e-learning はさらに英語学習へのモチベーションが高い学生が受講している場合が多い。ただし、通常の授業内でも英語に触れる機会が多い外国語学部の GCI 生の場合、空き時間などにも英語学習を行うことを望んで GCI e-learning を受講するのに対し、国家資格を取るための専門の授業で 1 限から 6 限までがほぼ埋まってしまいうような保健医療技術学部の GCI 生の場合、英語学習を続けようと思うと授業時間外に自宅等で学習ができる GCI e-learning を受講するほかない。このように、授業の履修目的は、

* 准教授／英語教育

** 人間学部助教／心理学

受講生の所属学部によって多少異なっている。しかしながら、GCI e-learningはGCIプログラム唯一の非対面型授業であり、時間割やカリキュラムが異なる全学部の学生が同時に受講できるよう、空き時間や自宅などでも学習ができるという柔軟さを実現した自習型の授業である。2016年度はGCI 4年間のプログラムを修了する卒業生を初めて迎える完成年度である。本稿ではこれまでの履修データ、TOEIC IPスコア、アンケート結果などのデータを分析する。

2. 目的

本学初の試みである全学部横断型GCIプログラムの選択科目であり、「三ラウンド・システム」(竹蓋・水光 2005)に基づくCALL教材シリーズを使った自習型の授業として2013年度～2016年度前期までに開講された「e-learning I、II、III、IV、V、VI、VII」について、履修者数、履修率、履修回数、合格率等のデータから受講状況を概観し、TOEIC スコアから学習効果について、また、アンケート結果から主観的評価を分析し、本科目の成果とこれからの展望を考察する。

3. 授業概要

3.1. GCI 選択科目「e-learning I～VIII」

GCI e-learningの受講生は本学両キャンパス（東京都文京区の本郷キャンパス・埼玉県ふじみ野市のふじみ野キャンパス）のどちらかに所属しており、両キャンパスの教員が共同で授業を行っている。この科目は2013年度から毎学期開講され、1年次にはI、IIを、2年次にはIII、IV、3年次はV、VI、4年次はVIIとVIIIをそれぞれ前期、後期に履修することができる（GCIの英語のカリキュラムについては表1を参照）。

本稿を執筆中の2016年9月においてGCI e-learning VIIまでが開講された。ただし、GCI e-learning I、II、III…と授業名は異なっているが、運用上は1つの授業となっている。対面授業は行わず、受講生は授業の空き時間等を使って学内のコンピュータ教室や自宅で学習を進め、3週に1度のテストを所属キャンパスで受験する。

学習教材は「三ラウンド・システム」にもとづくCALL教材「Listen to Me!」シリーズ（教材の詳細リストは付録1参照）のオンライン版を使用した。毎学期、個々の学生の英語力と過去の教材使用歴を調査し、教材を割り当てた。学習者はインターネット環境とWindowsがあれば学内だけでなくどこでも学習できる環境であった。学習者の学習履歴は学習管理システム（高橋 2010）で管理し、教員は担当学生の学習状況を毎週確認した。Listen to Me! のテストは、教材内の語彙と英語音声の内容理解、音声形式の聞き取りについて測るテストで、英単語またはフレーズの音声を聞いて意味を答えるもの、英語音声を聞いて内容に関する質問に答えるもの、英文並べ替え問題、英文空所補充問題を約20分で解くオンラインテスト（付録2）であった。加えて語彙教材として本学で開発された「TOEIC Vocabulary」をオンライン化したものを用いた。TOEIC Vocabularyのテストも、同じくオンラインで解答するもので、単語の音声から意味を解答するものと用例の空所補充問題で約10分程度の規模のものであった。

表 1 : GCI カリキュラム (英語科目のみ)

Course Field	Course Title	Grade, Semester	Credits			Language (used in a class)	
			Required	Elective Required	Elective	English	Japanese
English Program	Grobal English I A-a	1,S	1			○	—
	Grobal English I B-a	1,S	1			○	—
	Grobal English I A-b	1,F	1			○	—
	Grobal English I B-b	1,F	1			○	—
	Introduction to Grobal English	1,F	2			○	—
	Grobal English II -a	2,S	1			○	—
	Project-Based English I-a	2,S	1			○	—
	Grobal English Workshop Basic a	2,S	1			○	—
	Grobal English II -b	2,F	1			○	—
	Project-Based English I-b	2,F	1			○	—
	Grobal English Workshop Basic b	2,F	1			○	—
	Project-Based English II A-a	3,S	1			○	—
	Project-Based English II B-a	3,S	1			○	—
	Grobal English Workshop I-a	3,S	1			○	—
	Project-Based English II A-b	3,F	1			○	—
	Project-Based English II B-b	3,F	1			○	—
	Grobal English Workshop I-b	3,F	1			○	—
	Grobal English Workshop II-a	4,S	1			○	—
	Grobal English Workshop II-b	4,F	1			○	—
	e-Learning I	1,S				1	—
	e-Learning II	1,F				1	—
	e-Learning III	2,S				1	—
	e-Learning IV	2,F				1	—
	e-Learning V	3,S				1	—
	e-Learning VI	3,F				1	—
	e-Learning VII	4,S				1	—
e-Learning VIII	4,F				1	—	

本郷キャンパスでは1学期につき2クラス (阿佐・与那覇が1クラスずつ担当)、ふじみ野キャンパスは1クラス (畑が担当) を毎学期開講し、テスト週のみ各クラスの指定された時間にコンピュータ教室でオンラインテストを実施した (付録2参照)。本学で開発したListen to Me! と TOEIC Vocabulary のテストは、パスワードでアクセスが制限されており、担当教員もしくは職員が監督時のみアクセスができる。試験監督時、毎回異なるパスワードを設定してアクセス可能にし、試験終了後、学習者は一切アクセスすることができない。テストが実施されない週に対面形式の授業はなく、受講生は各自それぞれの都合のよい時間にそれぞれのペースで教材を自習した。

各クラス担当として阿佐・畑・与那覇の3名は、主にメールを使って指導を行った。メール以外では、本郷キャンパスでは文京語学教育センター (BLEC) で阿佐・与那覇もしくは BLEC 職員、ふじみ野キャンパスでは畑もしくは Global Studies Institute (以下 GSI: GCI 関連業

務と国際交流業務を行う事務部門)の職員が対面でのサポートを適宜行った。

受講生が集まってテストを受験する時間に他の授業や実習などで都合がつかない場合に限り、BLECもしくはGSIオフィスでテストを別時限に受験することを許可した。事前に予約を入れ、テストを行う週の中で実施することとし、他の学習者と時間的な不公平が出ないようにした。なお、ふじみ野キャンパスでは複数の学部学科に受講生が所属しており、学生ごとに時間割が異なっているため、共通の時間帯を設定することが難しい学期もあった。複数の学生が同時にUnitテストを受講する時間帯を設けることができなかつた場合は、担当教員が複数回試験を行って、可能な限り多くの受講生のテストに立ち会えるよう対応した。

3.2. 成績評価と授業スケジュール

本科目の成績評価の割合と学習スケジュールについては以下のとおりであった。

成績評価の割合

- (1) Listen to Me! のUnitテスト (計5回) * = 60%
- (2) TOEIC Vocabularyテスト (計5回) = 20%
- (3) 学期末 TOEIC IPテスト = 20%

*学習時間が各Unitの学習時間ノルマに足りない場合は足りない時間が多ければ多いほどUnitテストの点を減点、ノルマ超過分は超過分に応じて加点を行った。

表2：学習スケジュール

	Listen to Me! 自習範囲	TOEIC Vocabulary 自習範囲	テスト	
			Listen to Me! (学習時間ノルマ)	TOEIC Vocabulary
授業前	事前オリエンテーション			
第1週	Unit 1 Step1			
第2週	Unit 1 Step2	Set 1		
第3週	Unit 1 Step3	Set 2	Unit 1	Set1-5 テスト (1回目)
第4週	Unit 2 Step1	Set 3	(↑ここまでに合計 4.5h)	
第5週	Unit 2 Step2	Set 4		
第6週	Unit 2 Step3	Set 5	Unit 2	Set6-10 テスト (1回目)
第7週	Unit 3 Step1	Set 6	(↑ここまでに合計 9h)	
第8週	Unit 3 Step2	Set 7		
第9週	Unit 3 Step3	Set 8	Unit 3	Set1-5 テスト (2回目)
第10週	Unit 4 Step1	Set 9	(↑ここまでに合計 13.5h)	
第11週	Unit 4 Step2	Set 10		
第12週	Unit 4 Step3		Unit 4	Set6-10 テスト (2回目)
第13週	Unit 5 Step1 / 次の教材 Unit 1 Step1*1	Set 1-5	(↑ここまでに合計 18h)	
第14週	Unit 5 Step2 / 次の教材 Unit 1 Step2	Set 6-10		
第15週	Unit 5 Step3 / 次の教材 Unit 1 Step3	Set 1-10	Unit 5 / Unit 1	Set1-10 総復習テスト
学期終了時		学内 TOEIC IP テスト	(↑ここまでに合計 22.5h)	

*1 Listen to Me! シリーズは教材によってUnit4までの構成のものがあり、その場合は次の教材のUnit1を学習した。

本郷キャンパス・ふじみ野キャンパスのデータはExcel上で1つにまとめた上で、Listen to Me! と TOEIC Vocabulary のテストの結果と学習時間、期末 TOEIC IP の結果を入力して一括で成績を算出した。その際、何か問題があれば担当教員3名で話し合った上で、合同で評価を行い、担当教員によって評価が異なることがないようにした。

阿佐・畑・与那覇 (2013) で結果報告した2013年度前期のGCI e-learning Iでは、各Unitの学習時間のノルマを越えていない場合は、学期途中で不合格が確定するルールを適用していた。しかし、ノルマ達成のための無意味なログインや駆け込み学習が見られたため、ノルマ時間を越えなかったことだけで不合格にすることはせず、不足時間が多ければ多いほどテストの点数を減点するルールに変更した。さらに、阿佐他 (2013) の考察で言及した「ノルマが足りないことを警告するといういわゆるネガティブな内容のメールだけでなくポジティブな介入」を実現するため、成績評価の部分でも学習時間についてノルマを越えれば越えるほどテストの点数に加算する方法に変更した。また2013年度後期からは、教員の介入を増やすため、それまでの3週間に1度のメール送信だけでなく、学習時間の途中経過やテスト結果などをクラス毎に毎週メールを送ることとし、加えて、テストの直前には全体メールで英語学習のためのコツや先輩の体験談、他のクラスの学習状況などを伝え、直前の駆け込み学習を予防し、学習の定着を促した。その毎週のメール連絡でも、学習時間ノルマを大きく越えている者について適宜言及するなどポジティブな介入を行った。

3.3. 受講者

東京学院大学に在籍するGCI生の詳細を以下に示す。2016年現在に在籍している1～4年生の合計は292名（退学者および途中でGCIプログラムを辞退した者を除く）であった。なお本論文で「現1年生」「現2年生」「現3年生」「現4年生」と呼称する際は2016年度の学年を示すこととする。

表3：GCI生の在籍数と学部内訳 (名)

在籍数		現1年生	現2年生	現3年生	現4年生	総在籍数
		78	73	73	68	292
学部内訳	外国語学部	47	56	49	40	192 (65.8%)
	経営学部	20	9	14	16	59 (20.2%)
	人間学部	6	6	5	10	26 (8.8%)
	保健医療技術学部	5	2	5	3	15 (5.1%)

表3が示すとおり、外国語学部生が全体の65.8%を占める。GCIプログラム以外の英語の必修科目は各学部のもの履修するが、外国語学部生は他の学部の学生よりも英語の必修科目が多い。後述の学習効果についてはe-learning以外の授業の影響も考慮に入れる必要がある。

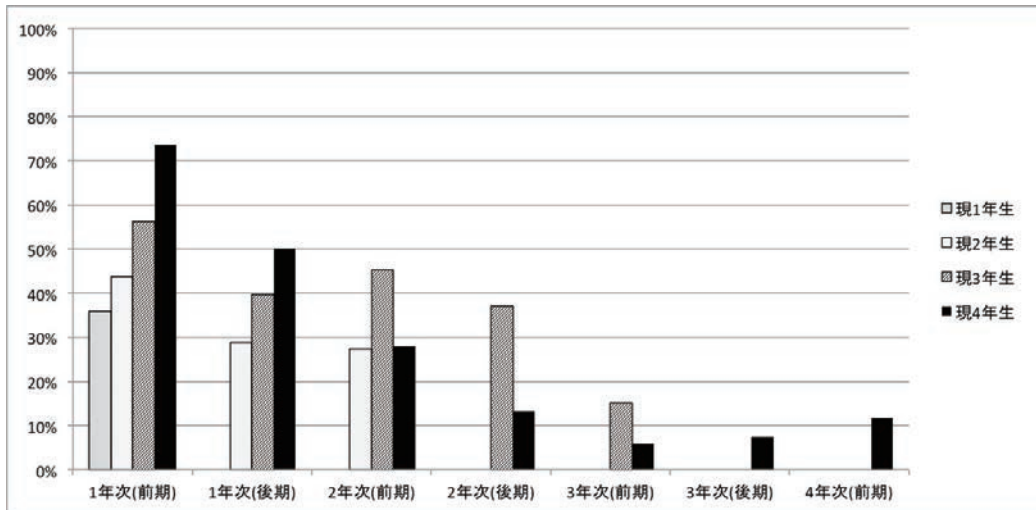
次に、これらのGCI生の内どのくらいの学生が2013年前期～2016年前期までの3年半の間、GCI e-learningの授業を履修してきたのかを表4にまとめた。

表4：学年毎の履修者数と履修割合 (名)

現学年	人数	1年次		2年次		3年次		4年次	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期 <small>※執筆後 初実施</small>
1年生	78	28 (35.9%)							
2年生	73	32 (43.8%)	21 (28.8%)	20 (27.4%)					
3年生	73	41 (56.2%)	29 (39.7%)	33 (45.2%)	27 (37%)	11 (15.1%)			
4年生	68	50 (73.5%)	34 (50%)	19 (27.9%)	9 (13.2%)	4 (5.9%)	5 (7.4%)	8 (11.8%)	

※「現学年」は2016年現在の学年。括弧内は各学年の人数に対する履修割合。グレーの部分は執筆時未実施

4年生は7学期、1年生は2016年度前期の1学期の履修機会があり、履修割合の単純な平均は意味を持たないため、履修者の加重平均（履修者合計 ÷ (在籍者数 × 開講学期数)）を出した結果約32.7%であった。つまり、2013年度～2016年度後期までに開講したe-learning I～VIIの履修率は3人に1人程度であった。これは平均的には67%弱の学生はe-learningを履修していなかったことを意味する。以下は各学年の履修率を学期毎に並べたグラフである。



※グラフ無しのもは2016年次未開講

図1：年次毎の履修率

本論文の執筆時（2016年9月）において、分析可能なのは2016年前期までのデータである。つまり、現4年生は4年前期までであり、後期のデータはまだ取れていない（1、2、3年も同様）。上図においてグラフが無いことは、データがまだ取れていないことを意味し、履修率が0%であったことを意味するわけではない。傾向として学年が進むに連れて履修率が減衰し、3年次以降は履修する者がほとんどいないことが分かる。また、学年が進むにつれ履修者が少しずつ

減少している。その原因としては、本科目開講初年度はどのような授業かよくわからないため多くの学生が履修したが、何年か経つうちにノルマ達成の大変さや、成績の厳しさなどが学生内で伝わり、敬遠する学生が増えた可能性に加え、自律学習が苦手な学生が増えている可能性も考えられる。

上記履修率はのべ人数であるため、同じ学生が次の学期で履修した場合も人数に含まれている。学年ごとに累積の開講数が違うため、履修回数を合算して比較することはできないが、開講数が同一の7回である4年生に絞って履修回数をまとめると平均で1.9回 ($SD=1.73$ 回、範囲: 0~7回) であった。

表5：現4年生の履修回数と割合

履修回数	人数	現4年生に占める割合
7回	2名	2.9%
6回	0名	0.0%
5回	4名	5.9%
4回	5名	7.4%
3回	11名	16.2%
2回	13名	19.1%
1回	16名	23.5%
0回	17名	25.0%

表5から0回のものが17名(25%)であったことがわかる。7回の履修機会がありながら、一度も履修していない学生が4人に1名いたことになる。1回のみの履修の学生と合わせると約半分の48.5%となる。上記は現4年生のみのデータであるが、範囲を拡げて1年生~4年生すべての学年で履修回数が0回のを集計したところ128名であった。これは総在籍数292名に対する43.8%である。43.8%が受講しなかったということは55.2%が1回もしくは複数回履修したことを示す。その履修をした学習者と履修をしなかった学習者間で、英語習熟度への影響や差があったか否かを検討するために、学習結果を次に考察する。本稿では授業を改善することを念頭に、結果を提示しながら考察を進めることとした。

4. 学習結果と考察

4.1. 合格率

現4年生の1年次前期の結果を報告した阿佐他(2013)では、修了率(学習時間のノルマを達成した者の割合)は95%であった。しかし、その者すべてが合格したわけではない。学習時間のノルマはこなしたが理解が不十分または内容が十分身につけていない場合、各Unitのテストで成績が悪く不合格になる。また学期末TOEICの点数も成績に加味されているため、授業成果を別の形で発揮できるかという応用力も含まれる。一方「授業態度」のような恣意的な項目は成績評価に含まれていない。つまり合格率は総合的な学習成果を表していると言える。以下に1年生~4年生の各年次の成績の結果の合計と合格率を示す。総在籍者ののべ人数であ

るため、「1年前期」の列は、現1年生の前期および2年生が1年生だった時の成績、3年生が1年生だった時、4年生が1年生だった時の成績の合計が示されている。また2016年度から再履修を許可したため、その人数も含む。どの年次のe-learningを再履修したかに関わらず、再履修をした学期の人数に加算した。

表6：各年次の履修者数および成績評価と合格・不合格率 (名)

	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期
履修者数	151	84	72	36	15	5	8
成績評価	AA	3	4	3	0	0	0
	A	33	7	13	7	1	3
	B	50	29	15	10	3	1
	C	34	23	20	9	5	0
	F	31	21	21	10	6	2
合格率	79.5%	75.0%	70.8%	72.2%	60.0%	60.0%	50.0%
不合格率	20.5%	25.0%	29.2%	27.8%	40.0%	40.0%	50.0%

3年次以降は履修者が少ないこともあるが、不合格率が40%から50%と高くなる。このことは、e-learningによって英語力を高めようという理由で受講するのではなく、GCIの取得単位が不足している学生、つまり他の授業で不合格になったり計画的に授業を履修してこなかった学生の割合が増えるためだと考えられる。また、3年次以降は専門の授業が増加するため、生活の中に自律学習を組み込むことが難しくなる学生が多いことも一因であると考えられる。

一方1、2年次の合格率は70%以上と比較的高く、また履修者数も36名～151名と多い。本科目の学習を最後まで学習し合格した者のサンプル数の観点から1、2年次のデータを分析することで学習効果を計ることができると考えた。2年生は本稿執筆現在2年前期までしか完了していないため、現3、4年生の1、2年次のデータに絞り、学習成果についてTOEICの結果などを分析する。

4.2. TOEIC スコア

4.2.1 概要

本項では合格率と2016年9月現在データの揃っている現3、4年生の1、2年次（2013年度～2014年度）に絞ってTOEICスコアの比較を行う。履修前後のTOEICスコア比較のためPre-testとして入学時のTOEIC IPテスト、Post-testとしてそれぞれの学年が2年次後期末に受けたTOEIC IPテストの点数を比較し、本科目の履修とその学習効果について考察する。各学期末TOEIC IPの実施時期が本郷キャンパスとふじみ野キャンパスとで若干異なる。本郷キャンパスで7月末～8月初旬、ふじみ野キャンパスでは6月に行われたものを前期末のデータとし、後期については、本郷キャンパスは1月末～2月初旬、ふじみ野キャンパスは11月に行われたものを後期末のデータとしているため、キャンパス間で1ヶ月半の差がある。4ヶ月半の1学期間で学習前後比較の分析をした阿佐他（2013）ではこの1ヶ月半の差は4ヶ月半の中の1ヶ

月半なので考慮が必要と考え、ふじみ野キャンパスのデータは削除した上で分析を行った。今回は数年間のデータの中での1ヶ月半であり、できるだけGCI全体データの分析として行うことを優先し、両キャンパスのデータを入れた上で分析を行う。なおPre-testについては入学時の4月のものを使用するためそのような差は生じていない。

執筆時の2016年9月において、現3年生73名と現4年生68名の合計141名が在籍しているが、Pre-testもしくはPost-testのどちらか1つでも受験していない学習者は比較ができないため分析から除いた。英語圏へ長期留学している者もその効果が大きな影響を与える可能性があるため、除外した。ただし、1ヶ月程度の短期留学経験者、および中国などの非英語圏への長期留学経験者はデータに含めた。また授業を履修はしたものの不合格になった学生は、学習が不十分であるためテストの点が低い学生だけではなく、途中で合格を諦め、学習を中断した者も含まれる。学習を中断したことで不合格となった者については、本科目を受講したとは言えないため、学習効果を計る前後比較の対象としてはふさわしくない。しかし1、2年次の前期後期合計で1～4回の履修機会があり、1回でも不合格の学期があるからという理由で、その学習者をTOEICスコアの分析データから除外すると、残るデータは受講したすべてのe-learningに合格した学習者のみが残る。これは、比較的熱心に取り組んだ学習者のみを抽出した分析者にとって都合の良いデータ操作になる恐れがある。それを避けるため、GCI e-learningを1度でも履修したことがある者について、成績AAを4、Aを3、Bを2、Cを1、不合格のFを0として成績を数値に換算し、その平均(以下「平均成績」とする)が1以下(0点台)の学習者26名は分析のデータから削除することとした。その結果、分析対象となった学習者数は以下の表の通りである。

表7：現3、4年生(分析対象のみ)の構成 (名)

	現3年生	現4年生	現3・4年合計
合計	49	35	84
(内訳) 外国語学部	40	33	73
経営学部	7	2	9
保健医療技術学部	2	0	2

※平均成績1以下、Pre/Post-test未受験、英語圏長期留學生は除く。

4.2.2 TOEICスコア(現3、4年生の1、2年次)の比較

分析対象の現3、4年生(84名)の入学時のTOEICスコア(Pre-test)は平均359点($N=84$ 、 $SD=82$ 点、範囲=185～635点)であった。分析対象の学習者の中で、GCI e-learningを1度も履修していない者を履修なし群(30名)、1度でも履修したことがある者を履修あり群(54名)としてTOEICスコアの伸びを比較したところ、履修なし群は入学時の平均TOEICスコアが355点($SD=71$ 点、範囲=235～480点)から2年次後期に452点($SD=110$ 点、範囲=285～690点)であったが、履修あり群は入学時の平均TOEICスコアが362点($SD=88$ 点、範囲=185～635点)から2年次後期には496点($SD=119$ 点、範囲=220～775点)、伸びは履修なし群は97($SD=93.8$)

点、履修あり群は134点 ($SD=72.2$) と履修あり群の方が37点多く伸びたことが分かった。各スコアのListeningパート、Readingパートを併記した表を以下に示す。

表8：履修の有無と TOEIC の伸び (分析対象全員) (点)

履修回数		Pre (入学時)	→	Post (2年次後期)	伸び
履修あり (1~4回) $N=54$	Total	362	→	496	134
	L	219		295	76
	R	143		201	58
履修なし $N=30$	Total	355	→	452	97
	L	210		273	63
	R	144		179	34

履修あり群と履修なし群のTOEICスコアの伸びについてF検定を行った結果、有意な差は見られなかった ($F(1,82) = .07, n.s.$) ため等分散であるとみなし、両群の伸びに関してt検定を行った。その結果、有意な傾向がみられた ($t(82)=1.85, p=.07, d=.42$) (表8)。

1、2年次には入学時と学期末の合計5回のTOEIC IPを受けることができる。そのスコアの推移を表9に示す。

表9：履修の有無と TOEIC の推移 (分析対象全員) (点)

		入学時	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期
履修あり群	TOEIC Total	362	417	450	474	496
	N	54	53	50	54	54
	SD	88	103	105	117	119
	max	635	750	715	680	775
	min	185	250	225	250	220
履修なし群	TOEIC Total	355	397	436	448	452
	N	30	19	26	23	30
	SD	71	61	99	94	110
	max	480	560	665	655	690
	min	235	305	235	310	285

現3、4年生で入学時と2年後期のどちらかのTOEIC IPを欠席したものは分析対象としないが、途中のTOEIC IPについては受験していない者もある(表9、Nの欄を参照)。履修あり群は分析対象54名中毎回50名以上が受験をしておりTOEICのTotalスコアは回を重ねる毎に着実に上昇していることが分かる。その推移のプロットを図2に示す。

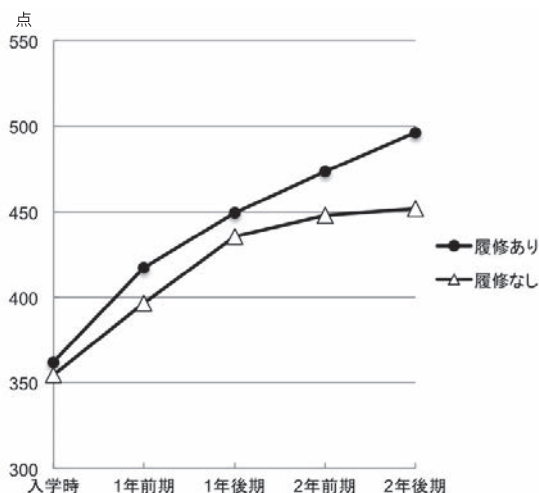


図2：履修あり・なし群のTOEICスコアの推移

履修あり群と履修なし群のTOEICスコアは、1年次は同程度であるが1年次後期以降は履修あり群と比較して履修なし群は得点が横ばいとなり、上昇が小さいことが分かる。次項では、この差について学習者の習熟度別に分析を行う。

4.2.3 上・中・下位群に分けた学習効果

次に分析対象の現3、4年84名を入学時の習熟度によって上・中・下位群の3群に分け、履修回数とTOEICスコアの伸びについて検討する。まず入学時のTOEIC Totalスコアが300点以下のものを下位群、300点以上400点未満の者を中位群、400点以上の者を上位群に分けてTOEICスコアをそれぞれ分析した。各群の詳細は以下の通りである。

表10：入学時の習熟度別 TOEIC Total スコアの平均 (点)

上位群	452 点 (N=25、SD=59 点、範囲 =400 ~ 635 点)
中位群	352 点 (N=39、SD=29 点、範囲 =305 ~ 395 点)
下位群	258 点 (N=20、SD=31 点、範囲 =185 ~ 295 点)

上・中・下位群の学習者をさらにe-learning履修あり群と履修なし群に分け、入学時から2年間のTOEIC平均スコアの変化をまとめたものを表11および図3に示す。

表 11：上中下位群の TOEIC スコアの推移 (点)

(上位群)	入学時	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	2 年間伸び
履修あり	455	494	562	576	583	128
履修なし	447	450	518	508	536	89

(中位群)	入学時	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	2 年間伸び
履修あり	354	406	426	458	486	132
履修なし	349	394	445	447	463	114

(下位群)	入学時	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	2 年間伸び
履修あり	256	337	354	369	401	145
履修なし	261	355	321	359	332	71

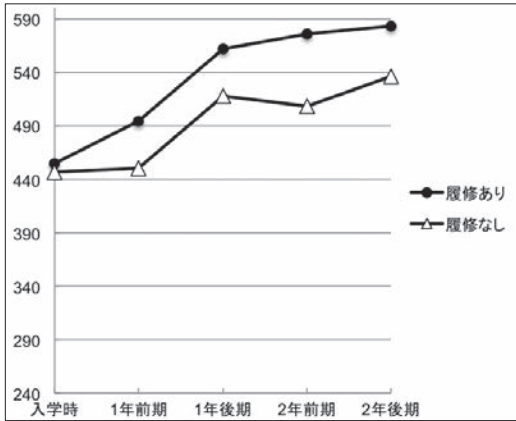


図 3-a：履修ありと履修なしの TOEIC スコアの推移 (上位群)

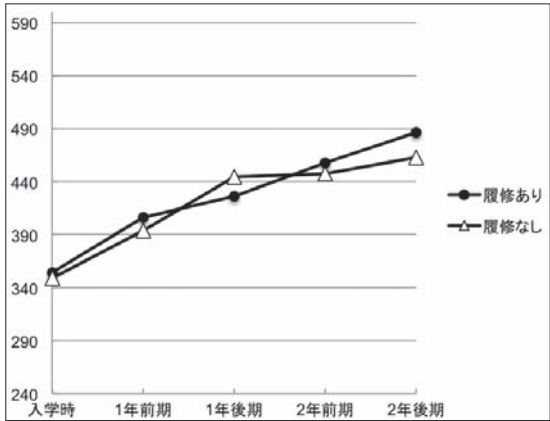


図 3-b：履修ありと履修なしの TOEIC スコアの推移 (中位群)

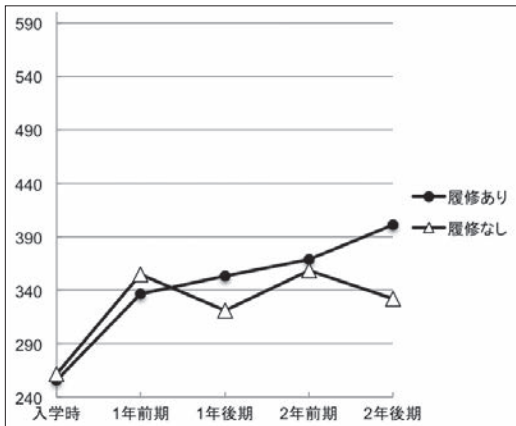


図 3-c：履修ありと履修なしの TOEIC スコアの推移 (下位群)

中位群では、履修の有無と成績の推移とに差が見られないが、上位群および下位群では学年が進むに連れてTOEICスコアの差が広がっている傾向にある。TOEICは、一般的に学習前のスコアが高ければ高いほど上がりにくい（竹蓋・与那覇・竹蓋 2006）ため、学習前のスコアが低い場合は相対的に大きな伸びを期待できるとも言える。上記図表の下位群がそれにあたり、下位群の履修あり群は平均145点の伸びを示し全群の中で最も伸びたことが分かった。しかし、履修なし群は、伸びやすいはずの下位群において71点しか伸びていない。これは全群の中でも最低の伸びである。下位群の履修なし群の入学時TOEIC平均スコアは261点であり、履修あり群は入学時256点であった。つまり入学時は履修なし群の平均スコアの方がやや高かったが、2年後期までの間に逆転されたと言える。その主要因がGCI e-learning履修にあったのかどうかについてははっきりしたことは言えないが、習熟度下位群において履修ありの場合、一定の学習効果があったと言えるだろう。しかし、本科目以外に同時に履修した別教科の影響、各学習者の自習による影響なども交絡しうる要素であるため、履修歴や自習頻度のデータなどさらにデータを蓄積して分析をする必要がある。

もっとも人数の多い中位群では、履修あり群、履修なし群ともに大きく平均スコアを伸ばしているため、GCI生で最も伸びやすい群である可能性が高い。GCIの英語プログラムの内容が中位群に合ったものであるのかもしれない。

上位群では、履修あり群と履修なし群の差が比較的顕著にみられる。他の要因が関係している可能性もあるが、GCI e-learningでは受講者のその時の英語力にあった教材を割り当てているため、比較的上位の学生でも継続して英語力を伸ばすのに貢献している可能性はあると考えられる。

4.3. 受講生のアンケート

4.3.1 概要

本科目は対面授業がない特殊な形態で実施しているため、大学として全授業で実施している「授業アンケート」に加えて独自のアンケート（付録3）を毎学期終わりに実施して、受講生の印象評価に関するデータを収集した。アンケートは無記名で成績には影響しない旨を周知し、最終授業日つまり最終テスト実施時にその場で回答させた。アンケートは20個の質問からなり、Q1～Q10は授業全体について、Q11～Q16は学習実態について、Q17～19はメールでの授業形態について、Q20は自由記述であった。授業全体の項目Q1～Q10は中心化傾向を避けるため4段階評価で行った。

アンケート調査を初めて実施した2013年度前期の結果は、阿佐他（2013）で報告したため、本稿ではその学期を除く2013年度後期から2016年度前期まで、計6学期分の延べ290名のデータをまとめた結果を報告する。アンケートの対象者はe-learning受講者全員であるが、無記名であるため、退学者および途中でGCIプログラムを辞退した者のアンケートも含む。複数回受講した学生については、全ての回におけるアンケートの回答が分析に含まれている。また項目

によっては、キャンパス間に分けての集計も行った。

4.3.2 アンケートの考察（授業全体について）

全20個の質問の中から特筆すべき項目を考察する。Q1～Q10の結果を以下の図4に示す。なおQ11～Q19は回答項目を質問毎に変更したため、Q11以降は質問毎に考察する。

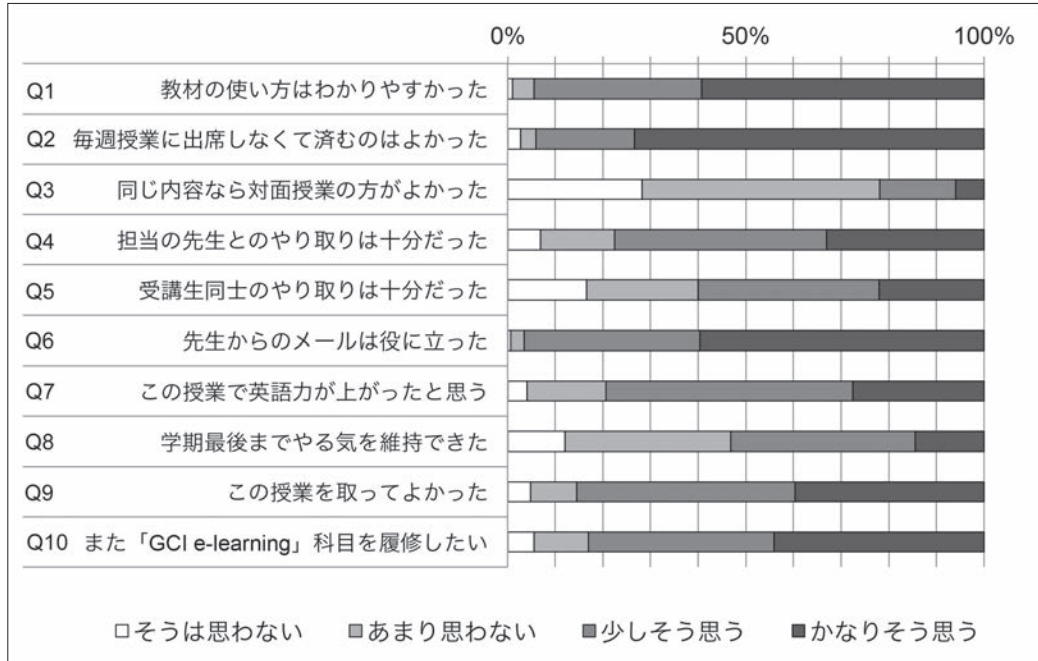


図4：授業全般に関するアンケート（4段階評価）

Q1の教材の使い方に関しては、約95%の受講生が肯定的な回答をした。一般的にe-learningを用いた授業では、教材の使いやすさが成功に大きく影響する（Zaharias & Poylymenakou 2009）が、操作性の高い教材を使用し、GCI生全員に入学時に教材の使い方を説明した結果であると考えられる。

次に、対面無しという授業形態に関するQ2とQ3について考察する。「毎週授業に出席しなくて済むのはよかった」と回答した受講生は94%であるにもかかわらず、「同じ内容ならば対面授業の方がよかった」と少し感じた者が16%、かなり感じた者が6%いたという結果になった。このことは、「授業に出席しなくて済むのはよかった」と回答した受講生の中にも対面授業を好む者が一部いたということの意味する。そこで、Q3について、本郷キャンパスとふじみ野キャンパスの受講生で違いがあるのかどうかを調査した。その結果、この項目に「少しそう思う」または「かなりそう思う」と回答した割合が本郷では15%だったのに対して、ふじみ野では42%であった。本稿の授業概要の部分で記したように、ふじみ野キャンパスの受講生は、対面なしを好んでGCI e-learningを選択しているのではなく、他に受講可能な英語授

業がないためGCI e-learningを受講している学生が多くいるため、このような結果になっている可能性がある。さらに両キャンパスで差が現れたのは、本郷キャンパスではほぼ常時GCI e-learningのサポートを提供するBLECがあるが、ふじみ野キャンパスには無い。このようなサポート環境の違いも無視できないであろう。

Q3, 4, 5は教員と受講生、または受講生同士のコミュニケーションに関する質問である。担当教員とのやり取りが十分だったと感じた受講生は約77%、メールが役に立ったと感じた受講生は97%であった。やり取りについては、受講生からメールまたは直接の質問や問い合わせはあまりなかったため、一部不十分であったと感じた受講生がいたのだと考えられる。メールについては、担当教員からは毎週、学習時間テスト結果、またテスト前にはテストのリマインダーと動機づけを目的とした内容を記したメールを配信していた。配信したメールがどの程度読まれているのか、どのように活用されているのかについては、確認することが難しく担当者としては不安なこともあったが、ほぼ全員が役に立ったと感じていたことがわかった。Q5は受講生同士のコミュニケーションについての項目である。対面なしのため、受講生同士が集まってコミュニケーションを取れる機会はほとんどなかったはずであるが、他の授業を一緒に受講している学生同士の情報交換をしていたのか、「不足している」と回答した受講生は40%にとどまり、対面なしという特殊な授業環境において、当項目を「不足している」と答える者が多いと予測していた我々の予想よりも少なかった。

Q7は成就感を問う項目であるが、78%の受講生がこの授業を通して英語力が上がったと感じたことがわかった。表8で示したように、本科目の履修者(履修あり群)の方が非履修者(履修なし群)よりもTOEICスコアの平均上昇量が大きかったことに加えて、受講生の主観的評価としても英語力が上がっていると感じた者が多かったことがわかる。Q8は学習動機の維持に関して問う項目であるが、否定的な回答をした受講生が合わせて47%と、他の項目に比べて多かった。これを、本郷キャンパスとふじみ野キャンパスに分けて観察したところ、本郷では否定的な回答が37%、ふじみ野では71%で大きな差があることがわかった。本郷は外国語学部生が多いため、他にも様々な英語の授業がある中でe-learningという特殊な形態の授業を好む学生が受講していること、もともと英語が好きな学生が多い上に、英語学習への動機を維持する環境が整っているのに対して、ふじみ野では自身の専門である「英語関連ではない科目」を中心に学びつつ英語学習もするという時間的制約や、他に選択する英語科目がないためにGCI e-learningを受講している学生が多いことが影響していると考えられる。また、ふじみ野では、毎回受講生の時間割に合わせて一斉受験のUnitテストの時間を調整しているが、全員のUnitテストの受験に立ち会うことはできないため、自律学習が難しい受講生や、受験ミスをしやすい受講生など、「気になる受講生」の受験に立ち会えるよう調整し、「気になる受講生」が受講を続けられるよう配慮した。こうすることで受験ミスを減らすことはできたが、その他の学生に対する働きかけが減ってしまった。ふじみ野では、学習動機を維持するための特別な工夫や、非対面型授業に適した働きかけ方が必要であることを示唆しているのかもしれない。

Q9は満足感、Q10は継続学習意欲を問う項目である。どちらも80%以上の受講者が肯定的な回答をしているため、少なくともこの科目を受講することを選択し、最後まで継続した受講生の大部分は満足し、続けたいと感じていることがわかった。

4.3.3 アンケートの考察 (学習実態と授業形態について)

次に、学習実態に関するアンケートの結果について報告する。

Q11 Listen to Me! はどのようなペースで学習していましたか

試験前数日のみ	試験前1週間のみ	試験前2週間のみ	毎週末のみ	1日おき	ほぼ毎日
22%	22%	16%	19%	14%	7%

学習の頻度に関する上記の質問に対する回答は、阿佐他(2013)での報告とほぼ同様であったが、「1日おき」に教材を使ったと回答した者の割合が阿佐他(2013)では5%であったのが14%に増加していることから、学習頻度が高い受講者がやや多かったと言える。受講生へのメールには、様々な視点から頻繁に学習することが高い効果につながることを学期に何回も呼びかけているが、テスト前にならないと学習を行わない受講生が多いことは残念である。メール以外の働きかけを考える必要があるかもしれない。

Q13 リスニング教材の学習時間のノルマについてどう感じましたか

かなり少なかった	やや少なかった	適切だった	やや多かった	かなり多かった
0%	3%	50%	38%	9%

上記の質問に対しては、阿佐他(2013)では「適切だった」と回答した受講者が65%いたのに対して、今回は50%であり、「多かった」と感じた受講生が増加したことがわかった。課題量を増やしたわけではないが、リスニング教材は上のレベルに行くほど、一度に学習する英語素材が長くなり、学習時間がかかるようになる。1年生だけではなく、上級生の受講生が増えているために「多かった」と感じる受講生が増えたのだと考えられる。

Q14 学習時間のノルマを超えるために、学習せずに教材を起動していたことがありますか

したことはない	1回程度	2,3回程度	締め直前は毎回	ほとんどいつも
40%	21%	28%	7%	5%

この質問に対しては、阿佐他(2013)では「したことがない」と回答した受講生が19%だったのが、今回40%と増加した。一方「締め切り直前は毎回」と回答した受講生が24%いたのが7%に減少している。本科目を初めて実施した2013年度前期には、学習時間のノルマを越え

なければ不合格としていたが、現在は学習時間を超えなくてもそれだけで不合格とはせず、不足時間にに応じてテストの点をマイナスする（時間が多い場合はプラスする）としたために、時間を稼ぐためだけに教材を起動している受講生が大幅に減少したのだと考えられる。

次に、教員のメールによる指導に関する質問項目を示す。

Q17 担当の先生から一斉メールの回数についてどう感じましたか

かなり少なかった	やや少なかった	適切だった	やや多かった	かなり多かった
0%	5%	92%	3%	0%

担当教員は週に1回、個々の学生の学習時間やテストのクラス平均点等を記したメールを配信し、テストの前の週にはテストの連絡と動機づけを目的としたメールを送っていた。上記の結果から、この頻度は大多数の受講生にとって適切であったことがわかった。

Q18 担当の先生からのメールを読んで、どのように感じましたか（複数回答可）

やる気が出た	あせる気持ちになった	うっとうしく感じた	あまり頭に残らなかった	ほとんど読んでいないのでわからない	メールは届かなかった
36%	56%	2%	11%	3%	0%

メールを読んで感じた事に関しては、「あせる気持ちになった」と回答した受講生が半数以上、「やる気が出た」と回答した学習者も36%いたことから、学習を促すという本来の目的はほぼ達成できていたと言える。しかしながら、「頭に残らなかった」「ほとんど読んでいない」という受講生もいることから、メールだけではなく他のアプローチが必要な受講生もいると考えられる。これらの学生はe-learningに向かないとするか、別の方法を考えるべきなのかはこれから検討する必要があるだろう。「メールが届かなかった」と回答した者はいなかったのは、授業開始直後にメールに関するトラブルを解消するように丁寧に働きかけをしたためであると言える。

「担当者とのコミュニケーションを取る方法が、メール以外にほしいと思いますか」という質問に対して肯定の回答は13%であり、ほとんどの受講生はメールでの指導で十分であると感じたことがわかった。

5. まとめと今後の展望

阿佐他（2013）で報告した駆け込み学習やノルマクリアのために時間を稼ぐだけの“希薄な学習”を避けるための成績配分の変更、やる気の維持のためのメール指導を3週間に1回から毎週に変更したこと、ポジティブな介入を増やし学習動機を高める工夫をしたことなどを通して、履修あり群は履修なし群に対してTOEICスコアを伸ばした。今後の具体的な指導で今回明らかになった結果を学生指導に還元したい。

3年次、4年次の履修率の低さが明らかとなったが、3年次までに学習方略を学び、自律学習ができる習慣を付け、GCI e-learningを履修せずとも学習を行っていきけるように成長することもまた重要である。また、本科目では英語を使うための基礎となる聴解力と語彙力の養成を目的とした教材を使用しているため、1、2年次に履修して付けた力を、本科目を履修する代わりに、3・4年次の専門の学習等で発揮できているとも考えられる。そうであるならば、3年次以降の履修率が低いことはそれほど問題ではない。履修を3年で諦めたのか、それともGCI e-learningの授業なしでも学習可能になったのか、GCI e-learningが不必要になるほど英語力をつけることができているのかについては、さらに多くのデータが必要となるため今後分析を行っていききたい。

アンケート結果から、受講者は上記の授業改善を概ね好意的に受け止め、学習を続けたことが分かった。本郷キャンパスとふじみ野キャンパスとで分けてアンケート結果を追っていくことで、キャンパス毎に抱えている問題点と必要なサポートの種類や量が異なることも垣間見えてきた。

また設備と時間割、それに伴う学習機会の問題も考えられる。GCI e-learningを受講するために必要なものは、インターネットに繋がるWindowsのコンピュータである。学内の設備は整っているため、空き時間を有効活用する分には問題なく学習を進めることができるが、空き時間がないため自宅で学習せざるを得ない場合は、自宅の環境によっては授業の受講自体が難しい場合がある（たとえば、自宅にはMacしかない場合やインターネットに接続されていない場合）。また、通学時間が長い学生からは電車内で学習ができるよう、スマートフォンで学習したいという要望もある。これについては対応予定であるのでその改善による効果も分析を行っていく必要がある。

教職員のサポートだけでなく、先輩から後輩へのサポートなどがあったこともポジティブな要因として考えられる。これについてはデータがないため、アンケートの項目に加えるなどの対策を取りたい。今回、TOEICスコアの比較データとしてまとめることができたのは現3、4年生のものだけであったので、4年分のデータを蓄積した段階でさらなる分析を行う必要があるだろう。

また、TOEICスコアや合格率などの量的な分析だけでなく、質的分析が不可欠である。4年間のプログラムの最後にインタビューを行い、習熟度別等に分析したい。加えて、履修者毎の英語科目履修歴の分析、e-learningを使用する他の科目との比較、不合格率の縮小のための方略の検討、またTOEICスコア向上のための改善方法を検討し、授業改善に繋げていく必要があるだろう。

引用文献

Zaharias P. & Poylymenakou, A. (2009) . Developing a Usability Evaluation Method for e-Learning Applications: Beyond Functional Usability, *International Journal of Human-Computer Interaction*. Volume 25,

2009 - Issue 1, pp.75-98.

阿佐宏一郎, 畑倫子, 与那覇信恵 (2013) 「自習型科目 GCI 「e-learning」」文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要, 第 13 号, pp.31-45.

高橋秀夫 (2010) 『統合型英語 Online CALL システム—社会のニーズに応える英語コミュニケーション能力を養成するための英語 Web CALL システムの開発—平成 19 年度～平成 21 年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム大学改革推進等補助金 (大学改革推進事業) 研究成果報告書』千葉大学

竹蓋幸生, 水光雅則 (2005) 『これからの大学英語教育』岩波書店

竹蓋幸生, 与那覇信恵, 竹蓋順子 (2006) 『文京語学教育研究センター活動報告 (2001 ～ 2004 年度)』文京語学教育研究センター


(2016.9.23 受稿, 2016.11.25 受理)

付録1：Listen to Me! シリーズのリストおよび対象学習者の目安

教材名 (略称)	レベル*	内容
English One (EO)	150 - 320	学校、家庭、職場など、日常生活の様々な場面での行なわれる短くてシンプルな対話から、英語リスニングの基礎を学べる。
First Step Abroad (FS)	250 - 380	語学研修や海外旅行で英語が必要になる場面を想定した「英語アナウンス」や「日常会話」など身近なトピック
First Listening (FL)	380 - 450	日常会話、アナウンス、ユーモア、スピーチ、ニュースなどすぐに役立つ幅広いトピック
New York Live (NY)	450 - 520	世界経済、金融、ビジネスの中心、そして文化、芸術、情報の発信地であるニューヨークの都市生活を紹介
American Daily Life (DL)	450 - 520	日本では触れる機会の少ない、米国郊外の衣食住関連の日常生活や文化を紹介
Introduction to College Life (IC)	520 - 590	The Times紙により世界第2位にランクされたカリフォルニア大学バークレー校の教授、職員、学生に対するインタビュー (入門編)
People at Work (PW)	520 - 590	店長、医師、弁護士等に対するインタビューを通して、アメリカで働く人々の仕事と生活を紹介
Canadian Ways (CW)	520 - 590	カナダのアルバータ州で行われたインタビューをもとに開発された教材。カナダのユニークな文化とカナディアンロッキーの美しい自然を楽しみながら学習できる。
College Life (CL)	590 - 660	The Times紙により世界第2位にランクされたカリフォルニア大学バークレー校の教授、職員、学生に対するインタビュー
Gateway to Australia (AU)	590 - 660	オーストラリアのメルボルンで行われたインタビューをもとに開発された教材。オーストラリアの文化、習慣、歴史を楽しみながら英語を学習できる。
English for Nursing Science (NS)	590 - 660	米国アラバマ大学看護学部で収録したビデオをもとに開発された看護系学生のための英語教材です。
Horticulture in Australia (HA)	590 - 660	オーストラリアのメルボルン大学やビクトリア州で収録したビデオをもとに開発された、園芸化学をテーマにした教材。オーストラリアの自然や文化にも触れながら学習できる。
A Bit of Britain (BB)	-660以上	ロンドンやイギリス南西部で行われたインタビューをもとに開発された教材。イギリスの歴史、伝統、文化も学習できる。
Art and Design in Britain (AD)	660以上	イギリスの美術大学やロンドンで収録したビデオをもとに開発された美術、デザイン、建築をテーマにした英語上級教材。
College Life II (CT)	660以上	The Times紙により世界第2位にランクされたカリフォルニア大学バークレー校の教授、職員、学生に対するインタビュー (発展編)
AFP News from the World	730以上	AFP通信社から配信された世界各国からのニュース報道`学ぶ上級用教材
World Health Issues (WH)	730以上	AFP通信社から配信された世界各地からの医療系英語ニュースを素材にした教材

*「レベル」は、想定される学習前の TOEIC スコア

付録 2 : Listen to Me! シリーズの Unit テストの画面キャプチャ

 <p>Listening Quiz</p> <p>名前 <input type="text"/></p> <p>学籍番号 <input type="text"/></p> <p>パスワード <input type="text"/></p> <p>LOGIN!</p> <p><small>CREDIT</small></p>	<p>Direction</p> <p>問題は計20題です。 解答の制限時間は、教員の指示にしたがってください。</p> <p>音声を聞いて答える問題もあります。⏮を押し、 あらかじめ音量を調節してください。</p> <p>[NEXT]ボタンを一度押すと、前の設問に戻ることはできません。 また、途中でやめることはできません。</p> <p>準備ができればSTARTボタンをクリックしてください。</p> <p>START!</p> <p><small>Volume</small> ⏮ 0000.0000 ⏭</p> <p>QUIT</p>
<p>[1] 音声を聞いて、それぞれの語句に対応する日本語を選びなさい。 音声は、2回まで聞くことができます。</p> <p>⏮ Q1. Ⓐ それは場合によるな Ⓑ それはやめた方がいい Ⓒ それは難しい Ⓓ それは価値がある</p> <p><small>Volume</small> ⏮ 0000.0000 ⏭</p>	<p>[4] Unit1 で学習した内容を思い出し、()に入るべき英語をキーボードを使って タイプしなさい。 * ()内の文字(セント)もタイプすること。</p> <p>Q16 : Do you think I should sell my stamp collection? : That depends. How much is it (w)?</p> <p><input type="text"/></p> <p>NEXT</p> <p><small>Volume</small> ⏮ 0000.0000 ⏭</p>

付録3：学習者アンケート (GCI e-learning 用)

GCI e-Learning 受講者アンケート

回答日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

このアンケートは、今後の授業改善に役立つ情報を集めるために実施するものです。

各項目に対して4段階で評価してください。(当てはまるものに○をつける)

	思 わ な い	そ う は	あ ま り 思 わ な い	少 し そ う 思 う	か な り そ う 思 う
1 教材の使い方はわかりやすかった	1	2	3	4	
2 毎週授業に出席しなくて済むのはよかった	1	2	3	4	
3 同じ内容なら対面授業の方がよかった	1	2	3	4	
4 担当の先生とのやり取りは十分だった	1	2	3	4	
5 受講生同士のやり取りは十分だった	1	2	3	4	
6 先生からのメールは役に立った	1	2	3	4	
7 この授業で英語力が上がったと思う	1	2	3	4	
8 学期最後までやる気を維持できた	1	2	3	4	
9 この授業を取ってよかった	1	2	3	4	
10 また「GCI e-Learning」科目を履修したい	1	2	3	4	

各項目に対する答えとして最も近いものに○を付けてください。

11) Listen to Me! はどのようなペースで学習していましたか

試験前数日のみ 試験前1週間のみ 試験前2週間のみ 毎週末のみ 1日おき ほぼ毎日

12) 教材の学習量(リスニング 5ユニット、語彙10セット)についてどう感じましたか

かなり少なかった やや少なかった 適切だった やや多かった かなり多かった

13) リスニング教材の学習時間のノルマ(1ユニット4.5時間)についてどう感じましたか

かなり少なかった やや少なかった 適切だった やや多かった かなり多かった

14) 学習時間のノルマを超えるために、学習せずに教材を起動していたことがありますか

したことはない 1回程度 2, 3回程度 締切直前は毎回 ほとんどいつも

15) 受講生が教室に集まってテストや授業を受ける回数として適切なのはどれくらいだと思いますか

最初と最後(計2回) 3週に1回(計5回程度) 2週に1回(計7回程度) 毎週(計15回)

- 16) 教材がうまくつかえない等のトラブルがありましたか(どちらかに○) はい いいえ
→「はい」の場合 どのように解決しようと思いましたか(複数の場合は、行った順番を[]に記載)
友達に質問[] メールで担当者に質問[] BLECやGSIオフィスで直接質問[]
その他[] (具体的に)
- 17) 担当の先生から一斉メールの回数についてどう感じましたか
かなり少なかった やや少なかった 適切だった やや多かった かなり多かった
- 18) 担当の先生からの一斉メールを読んで、どのように感じたことが多かったですか(複数回答可)
やる気が出た あせる気持ちになった うっとうしく感じた あまり頭に残らなかった
ほとんど読んでいないのでわからない メールは届かなかった
その他(具体的に:)
- 19) 担当者とコミュニケーションを取る方法が、メール以外にほしいと思いますか(どちらかに○) はい いいえ
→「はい」の場合
どんな手段を希望しますか(当てはまるものに○ 複数回答可)
対面の機会を増やす 電話をかけられるようにする Web上に掲示板等を設ける
その他(具体的に)
- 20) GCI e-Learningの授業について、改善してほしい点、よかった点など、自由に意見を書いてください。